

感情 (Emotion) からアプローチする動物倫理の可能性 ——フェミニズム、徳倫理学の限界と展開¹

鬼頭葉子

序

動物倫理の主流として、P. シンガーのように功利主義、また T. リーガンのように権利論に依拠する理論がある。これらはともに、動物への「正義 (justice)」にかなった関わり方を求めるものだと考えられるが、倫理学の潮流においては、正義理論の普遍性・絶対性に対し、個別性や文脈依存性を重視する方向性も見えて取れる。動物倫理においても、1990年代以降、フェミニズムの観点から動物へのケア倫理を提唱する立場がみられる。他にも徳倫理学をもとに動物への配慮を考察する立場も見受けられる。フェミニズム、また徳倫理学に依拠する動物倫理は、共感 (sympathy) やエンパシー (empathy)、共苦 (compassion) といった人間の感情 (feeling, emotion) の動きに注目する点に共通する特徴がある。これらの「感情」には、どのような倫理学上の展望が見込めるだろうか。

本研究では、フェミニズムおよび徳倫理学を背景とする動物倫理の強みと弱点についてまとめつつ、「感情」から捉える動物倫理の展開可能性を探る。

第1節 フェミニズムに基づく動物倫理

第1項 ケアの倫理と共感——動物福祉論および動物権利論への批判

発達心理学者 C. ギリガンが、「ケアの倫理」を提唱し、正義理論とは異なる筋道を示したのが1980年代である。周知のようにギリガンの心理実験によれば、女兒は絶対に正しい一つの答えに向かうよりも、相手との関係性やその都度の文脈において、多様で柔軟な配慮 (ケア) をしようと試みる。また N. ノディングスも、倫理的行為の主要な指針は諸原理や規則であるという従来の立場を批判し、あらゆる倫理学的判断は「普遍化可能

¹ 本稿は、第70回日本倫理学会 (2019年) ワークショップ「動物倫理の可能性」において発表した内容に加筆・修正を行ったものである。

性 (universalizability)」を持たねばならないという言説を退けている²。ノディングスも「ケアの倫理」の提唱者として知られるが、ケアの倫理では、道德の原理原則や個別の行為の正しさを追究することに主眼はなく、いかにして他の人々と道德的に関わるかが重要な関心事となる。ノディングスによれば、「他者の現実 (reality) を私たちににとっての一つの可能性とみなすとき、私たちは耐え難い苦しみを取り除いたり、ニーズを満たしたり、夢を叶えたりするために、行為しなければならない」³。そして「ケアする」という行為の本質は、誰かについて心配や気遣いをする「専心没頭 (engrossment)」の状態にあることを指しているという。

このようなノディングスの「ケアの倫理」は、主に教育や養育における人間関係に限定されており、彼女は「専心没頭」の状態であるケアが、動物に対しても当てはまるかどうかという点に関して積極的ではない。特に動物と関係を持つことを選び取っていない人には、動物全般に対するケアや責務は発生しないことになる⁴。動物を飼うことを決めた人は、その時点でその動物と助け合う関係を成立させる可能性を人間の側から作り出している。だから、もしその動物に権利があるとすれば、人間が確立した関係性において、一定の権利を授けたからだとしてノディングスは主張する。この見解においては、動物は受動的に人間が与えた関係性の中に取り込まれるに過ぎず、動物の側からの関わりや、人間と動物との不可避な関係性は想定されていない。

しかし 1990 年代には、フェミニズムに依拠する思想家達が、「ケアの倫理」を動物倫理に適用しようと試みている。これらは feminist ethic of care (フェミニストのケア倫理) と呼ばれ、動物を、それぞれ感情 (feeling) を持つ個別の存在として捉え、それゆえ人間は彼らに対し道德的義務を有すると考える立場である⁵。これを中心に担った思想家として、キャロル・J・アダムス、グレッタ・ガード、ジョセフィン・ドノヴァンらが挙げられる。さらにフェミニストのケア倫理で重要となる要素は、attention (注目・配慮) である。ア

² Noddings, *Caring*, p. 5.

³ Ibid., p. 14.

⁴ Ibid., pp. 155-7.

⁵ Donovan & Adams, eds. *The Feminist Care Tradition*, pp. 2-3.

ダムスとドノヴァンによれば、フェミニストのケア倫理が、動物福祉論のアプローチ (animal welfare approach) と異なる点は、動物の苦しみを生み出している政治的・経済的システムに注意 (attention)を向け、そのシステムを動物が苦しむ元凶として捉える点である⁶。この意味で、ケアの倫理は単なる個人的なものではなく、政治的・社会的なものであることが主張される。特にアダムスの『肉食という性の政治学』によれば、肉食に代表される動物搾取をやめることは、男女が共に生きる社会、また人間と動物も共生する社会の新たな地平を拓くという⁷。またドノヴァンによれば、L. コールバーグと C. ギリガンの発達心理学研究で挙げられた事例「ハインツのジレンマ⁸」も、ケアの倫理から見れば、個人の権利や所有の問題ではなく、ヘルスケアシステムの不備を指摘する、社会的・政治的な課題となる⁹。

またフェミニストのケア倫理の特徴として、動物権利論 (animal rights theory) の前提を疑問視する点も挙げられる。その主張によれば、動物権利論は、①動物を人間同様に独立した行為主体 (independent agents) と捉える点、②動物を人間と類似するもの (similarity) とみなし、両者の差異を無視する点、これらが難点であるという¹⁰。動物を人間同様の行為主体とみなす①の視点は、不可避に②の視点の問題に行き着く。動物を人間と似たものと捉える見方は、動物独自の現実や問題状況に目を向けないことにつながる。C. マッキノンによれば、動物に人間同様の権利を付与するアプローチは、動物を彼ら自身の観点でとらえることに失敗しており、動物の問題の解決は、例えば同じく搾取されている女性の問題を解決することと同じではなく、彼ら自身のものでなければならない¹¹。

⁶ Ibid., p. 3.

⁷ Adams, *The Sexual Politics of Meat*.

⁸ 「ハインツのジレンマ」は、以下のようなストーリーを子どもに聞かせ、ハインツのなすべき行動とは何か、彼らに回答させたものである。ハインツは、病気に苦しむ妻を救う薬を求めているが、薬は高すぎて買えない。思い余ったハインツは薬屋に忍び込み、薬を盗んだ。コールバーグとギリガンの分析によれば、男児の多くがハインツは盗むべきだったと回答するが、女児の多くは薬屋と交渉することや、医療保険の必要性などに注目するという差異が確認できたという。

⁹ Donovan, "Attention to Suffering," p. 188.

¹⁰ Donovan & C. J. Adams, *The Feminist Care Tradition*, p. 5.

¹¹ MacKinnon, "Of Mice and Men," p. 270.

以上のような内容が、フェミニストのケア倫理による動物福祉論および動物権利論への批判的主張にあたる。さらにフェミニストのケア倫理は、2000年代に引き継がれ展開している。初期段階ではフェミニストのケア倫理は、先述のように政治的・社会的な搾取という文脈に立つ点がその最大の特徴であったが、次第に「共感 (sympathy)」のようなエモーショナルな要素が注目されるようになってきた。ただ「共感 (sympathy)」は、単なる感情ではない。L. グルーエンは「繋がりあう思いやり (entangled empathy)」という概念を提唱し、それを「相手が福利を得るように注意を払うケア的認知の型 (a type of caring perception focused on attending to another's experience of wellbeing)」と定義している¹²。人間は、自らを取り巻く世界を認知し把握するが、そこで他者がどのように世界を認知しているかを分かち合うプロセスを通ることによって、自らの認知の内容そのものを変化させることができる¹³。他者が認知しているものを知ろうと関わる (care) 営みを通して、我々は、自分が認知していた世界が今までとは異なってみえてくる経験をすることがある。グルーエンは自分と動物との差異、あるいは個別の動物同士の差異に注意を向けることこそケアの本質であると指摘する。ここで「ケア」の概念は、関係性を持つ個別の対象をいかに遇すべきか、個々の相手を正しく理解しようとする姿勢において考慮する、知的かつ情的な営みと捉えられる。彼女の思索は、個体及び種ごとの差異に注目し、ケアの概念を深化させた点に特徴がある。このような感情の概念を取り入れたケアの倫理は、身近な対象から配慮していこうとする行為の出発点としてよく機能する点に強みがあると思われる。

しかしこのような動物に対するケアの倫理の有効性については、さらなる考察が必要である。例えばケアの倫理で、コンパニオンアニマルのような身近な動物は配慮できても、野生動物や、人間にとって「有害」とみなされるような動物への配慮は難しいという批判もできるだろう。G. クレメントは、動物に対して、正義の倫理 (ethic of justice) よりケアの倫理 (ethic of care) が有効だというフェミニストの主張について検証を加えてい

¹² Gruen, *Entangled Empathy*, p. 3.

¹³ Ibid., p. 75.

る¹⁴。ドノヴァンとアダムスによれば、以下の4点から、正義の倫理よりケアの倫理が動物への道徳的配慮において有効であると主張される¹⁵。正義の倫理は、①自己以外の行為者から守られるべきテリトリーや所有物を有する、理性的かつ自律的で独立した行為者を想定する。②他者からの支援を必要としない、平等で自律的な行為者を想定する。③感情に依拠した主張を抑制する理性的なアプローチをとる。④道徳の普遍的ルールに焦点を当てるため抽象的である。これら4点により、正義の倫理は、動物への配慮で重要な役割を果たすと思われる感情 (feeling) を軽視し、与えられた状況の個別性に焦点を置いた文脈的アプローチができない点に課題がある。しかしクレメントによれば他者から守られるべきテリトリーを持つことや他者からの支援を必要としない独立した主体であることは、野生動物には当てはまってしまう。そうすると野生動物 (wild animals) には正義の倫理、家畜動物 (domestic animals) にはケアの倫理という二分法もあり得るかもしれない。しかしクレメントの結論によれば、正義／ケア、政治／個人、自然／人間、野生動物／家畜動物などの二分法は適切ではなく、両者は「共にはたらくもの (as working together)」と捉えられるべきである。人間と自然が相互に関係していること、また人間も自然の一部であることを考慮すれば、人間が自然 (野生動物) を、単に無縁なものとして不干渉のままにとどめておくことはできない。したがって野生動物にもケアの倫理が適用されるべきである。正義の倫理とケアの倫理が分けられるものではないことは、近年の思想状況に鑑みても、適切な理解だと思われる。しかし筆者は、文脈依存적であるというフェミニストのケア倫理における長所が、かえって欠点や限界になりうるという問題提起を以下で行いたいと考える。

第2項 フェミニズムに基づく動物倫理の限界

フェミニズム理論と動物倫理との親和性の背景には、エコフェミニズム思想が介在すると思われる。「エコフェミニズム」は、1970年代に登場してきた思想およびムーブメン

¹⁴ Clement, "The Ethic of Care and the Problem of Wild Animals," pp. 302-03.

¹⁵ Donovan & Adams, eds., *Beyond Animal Rights*, p. 14.

トである¹⁶。エコフェミニズムの主要な理論家である C. マーチャントは、自身の立場を「ラディカル・エコロジー」と呼び、自身の立場が人間以外の動物や植物など自然環境との関係性を捉えなおし、人間の自然に対する責任や倫理を厳しく問う立場であることを強調している¹⁷。マーチャントは、男性を中心に推進されてきた資本主義・開発主義が、自然および女性を奴隷状態に貶め、搾取し支配していると分析する。1970-80 年代に世界的な環境危機が叫ばれる中、マーチャントは、自然も女性も男性原理の支配から解放されることが必要と主張し、公正で持続可能な社会形成をめざす理論と実践方法を提唱した。1990 年代、欧米におけるエコフェミニズムは、実践や運動として、また哲学的・理論的アプローチとして世に隆盛した。マーチャントをはじめ、先述したアダムス、ドノヴァン、ガード、マーティ・キールらもエコフェミニズムの旗手である。エコフェミニズムの特徴は、人間に動物を支配する特権が発生しないという論拠を、人間も動物も自然の一部であるという認識においた点である¹⁸。この点、エコフェミニズムのロジックにおいて主張される動物との連帯は、女性と同じく搾取されているからという理由のみに由来するものではなく、そもそも自然／人間／動植物には切り離せない紐帯があることが前提されている。したがって単なるフェミニズムではなく、エコフェミニズムの視点がなければ、動物への配慮義務は成立しないことになる。この特徴は、フェミニズムが必ずしも動物との共闘に結び付かない事例からも見て取ることができる。

実際に日本のフェミニズム思想の状況では、欧米のようなエコフェミニズムも動物倫理も極めて影が薄く、女性と動物が支配原理に対して連帯するものとして捉えられてはいない。この事態は、日本のフェミニズム思潮において、エコロジー思想あるいはエコフェミニズムが導入された経緯に起因するように思われる¹⁹。横山道史によれば、日本でエコフェミニズムが提唱された際、その内容をめぐってフェミニズムの側からの批判、いわゆる「エコフェミ論争」が巻き起こった（1985 年）。この時提唱されたエコフェミニズム

¹⁶ Adams & Gruen, eds. *Ecofeminism*, pp. 9-10.

¹⁷ Merchant, *Radical Ecology*.

¹⁸ Adams & Gruen, eds., *Ecofeminism*, pp. 24-5.

¹⁹ 横山道史、「日本におけるフェミニズムとエコロジーの不幸な遭遇と離別」。

は、欧米で隆盛したものとは異なり、自然に近い女性の原初的な力といった神話的要素や、前近代的・非西洋的要素を讃美する内容を強く持っていた。こういった特徴は、母性主義や女性原理への復古主義と捉えられ、他のフェミニズムの論客からの批判を受ける対象となったのである。また 1980 年代当時、バブル景気を迎えた日本の社会状況においては、未だ経済成長が期待されたため、欧米のエコフェミニズムの中心軸であった、資本主義や開発主義への批判や、環境持続性の取り組みは根付くことがなかった。もちろん、欧米のエコフェミニズムが提示していた課題、環境問題や労働問題が、当時の日本で存在していなかったわけではない。

このような日本におけるフェミニズム思想の受容史は、フェミニズムが文化背景や社会状況によって、独自の発展に至る柔軟性と同時に、思想的な脆さも持ち合わせていることを示している。フェミニズム思想で支持されるケアの倫理は、一般的に妥当する行為規範や権利主体への義務といった普遍主義を批判し、具体的・個別的な相手との関係性においてなすべき行為を見出そうとする。フェミニズム思想の立場では、男性中心の思想史において伝統的に追及されてきたとされる、いかなる場所や文化においても妥当するような絶対的な原理は批判の対象となり、特定の状況を考慮して文脈化 (contextualization) していく手法が採用された。普遍主義を批判する文化一文脈主義は、フェミニズムの長所や展開可能性であると同時に、短所にもなると考えられる。時と場所によって如何様にも変化でき、またその変化が許容されるとしたら、エコフェミニズムの受容の事例のように、フェミニズム思想は別様に展開することもできると同時に、どの方向へ進んでいくかを曖昧にしたまま、思想の一貫性が保てないという状況にも至りうるだろう。

動物権利論を提唱したリーガンは、フェミニストのケア倫理に関して、ケアとシンパシーの個人的経験を普遍化することに失敗している点を批判している²⁰。しかし筆者は、フェミニストのケア倫理を動物倫理として導入することについて、リーガンが指摘するような「普遍化可能性」の不在や個別性が問題の本質なのではなく、フェミニストのケア倫理では「動物への配慮」や動物との連帯といった主要な要素も、文化依存的に捨象されて

²⁰ Regan, *The Thee Generation*, pp. 95-6.

しまう可能性がある（すなわち文化によっては「動物への配慮」が考慮されない「フェミニストのケア倫理」というものがありうる）のではないかという点である。動物倫理との関係においても、欧米では密接な連関があった一方、日本のフェミニズム思想および「エコフェミニズム」は、動物倫理の理論構築には寄与しなかったことが好例だが、フェミニズムと動物への配慮の結びつきには、必然性があるとはいえない。その点で、フェミニズム思想に基づく動物の声の代弁は、特に日本のフェミニズム思想の状況においては、共有可能性や必然性という要素で疑問が残るのである。

第2節 徳倫理学に基づく動物倫理

第1項 徳倫理学の可能性

しかし筆者はここで権利論に立ち戻るべきとの見解をとらない。さらに注目したいのは徳倫理学の観点である。D. ドンブロウスキは、動物への配慮を考える二つの主流である権利論と功利主義の限界を指摘しつつ、近年の動物倫理で用いられるようになった徳倫理学のアプローチを評価している。例えば道徳的行為としての菜食という事例について、功利主義の問題点が指摘される。ドンブロウスキによれば、功利主義においては以下の三段論法で肉食が制限されることがある。すなわち、①工場畜産による肉の生産は動物に苦しみを与える。②人間は肉を食べなくても健康に生きられる。③よって動物の肉を食べない方がよいというロジックである²¹。功利主義で成立しうるこのような言説は、果たして動物に対する道徳的態度の表明であるといえるだろうか。この言説のみでは、特定のコミュニティに属する個々人の立場から、動物との関係性そのものがどのようにあるべきかという問題を考えるには十分でない。このような問題を考慮するにあたっては、共同体において目指すべき美德に注目する徳倫理学の観点が必要になってくる。

徳倫理学において動物倫理を考察する論者としては、R. ハーストハウスらの著作がある。ハーストハウスは慈悲 (compassion) の語に注目し、美德のある人は動物に対しても compassionate であり、そのような人は動物に対して残酷にふるまうことはないという観

²¹ Dombrowski, “The Argument from Marginal Cases,” p. 155.

点から動物倫理を取り上げている²²。慈悲 (compassion) という概念の導入は重要なポイントで、動物に関する徳倫理においては、R. スクルートンに対するハーストハウスの批判が有名である。スクルートンはキツネ狩りには「勇気」という美德が関連することを主張するが、ハーストハウスはそこには「残酷さ」という悪徳があり、同一の行為において美德と悪徳とが共存することはできないと述べている²³。M. ローランズは、「道徳的美徳 (moral virtue)」と道徳的価値を追求しない「実行的美德 (executive virtue)」を区別することを提唱している²⁴。勇気は実行的美德であり、慈悲は共同体において目指される道徳的価値である。ローランズによれば、リーガンにおける「権利」が「切り札」の役割を果たすように、徳倫理学における道徳的価値も「切り札」として機能するという。筆者は、特定の共同体のなかで動物への道徳的配慮が共有されうること、目指すべき目標が示されるという点で、徳倫理学には強みがあると思う。

第2項 徳倫理学の限界

とはいえ、徳倫理学にも固有の弱点があると思われる。徳倫理学の内側からは、M. スロートによる批判がある。スロート自身は動物への配慮義務について言及しているわけではないが、徳倫理学への批判および動物倫理の新たな可能性としてみるべきものがあると思われる。スロートによれば、ある行為が正しいかどうかは、行為者の内的特質（動機、傾向性、徳性など）の評価に依存する。行為の正しさは、行為者の内的状態についての評価から切り離すことはできず、行為者の動機が普遍的な善意 (universal benevolence) により近いものであればあるほど、その行為は正しいとみなされる²⁵。逆にその行為の動機が、悪意ある不十分なものであれば、その行為は正しくない。

このようなスロートによる道徳的判断の基準は、ハーストハウスに代表される、アリストテレス主義的な徳倫理学に対する批判として提唱されたものである。ハーストハウス

²² Hursthouse, *Ethics, Humans and Other Animals*, p. 163.

²³ Ibid., p. 161.

²⁴ Rowlands, *Animal Rights*, p. 111.

²⁵ Slote, *Morals from Motives*, p. 115.

は正しい行為の基準について、以下のように規定する。ハーストハウスによれば、行為者がある状況において、有徳な行為者がその性格特性に即して行為するようにふるまうのであれば、その行為は正しいとみなされる²⁶。ここには、行為の正しさが特定の状況においてそれがふさわしいものであるかどうか依存し、「有徳な行為者」は状況においてどう行動するのが正しいかをよく理解している人である、といったアリストテレスの徳についての理解が想定されている。しかしスロートによれば、このような徳倫理は、「有徳な行為者であればこのようにふるまうだろう」という想定のもと、「有徳な行為者」そのものを行為の正しさの基準としてしまい、行為者の内面に着目できていない²⁷。アリストテレスは、美德のない人が、他者に命令されて善い行いや有徳な行為をなしうるケースも認めている。よってスロートは、「有徳な人が行為するのだからその行為は正しい」という理解をとらず、美德を構成するものはいったい何かを問うべきだとしている²⁸。

スロートによれば、美德を構成するものは、行為者が持つエンパシー (empathy) であり、行為者の内面の動機にエンパシーがあるかどうか道徳的行為の評価基準となる。スロートのいうエンパシーとは、他のだれかが痛がっているところを見たときのように、他者の気持ちを（意図的でなく）自らのうちに抱き、自身が痛みを感じることであり²⁹。類似する概念「シンパシー (sympathy)」が、痛みを覚えている他者のために感情を動かすことを指すのに対し、エンパシーは痛みを自らのうちに感じることでとされる³⁰。スロートは、エンパシー概念を道徳的動機にとって不可欠とみなし、行為者基底的な道徳的判断の基準と定めている³¹。スロートによれば、このエンパシーは誰にでも備わっており、共同体において成長しうるものと捉えられている。エンパシーの原型としてスロートが挙げるのは、乳児が他の子どもの泣き声に反応して連鎖的に泣き出すケースである。このようにエンパシーの成長可能性やその方向性を共同体において期することができる点は、エン

²⁶ 加藤／児玉編、『徳倫理学基本論文集』、257 頁。Hursthouse, *On Virtue Ethics*, p. 28.

²⁷ Slote, *Morals from Motives*, p. 5.

²⁸ Ibid., p. 6.

²⁹ Slote, *The Ethics of Care and Empathy*, p. 13.

³⁰ Slote, *Moral Sentimentalism*, p. 15.

³¹ Ibid., p. 125.

パシーのような感情という要素を取り入れた徳倫理学の展開可能性であると考えられる。

第3節 まとめ——「感情」への再評価と動物倫理の可能性

倫理学・哲学の系譜において、ヒュームやアダム・スミスに代表される、理性よりもむしろ人間の感情に道德の原理を見出そうとする感情主義 (sentimentalism) の潮流があった。ヒュームの『道德原理研究』によれば、理性は道德的是認あるいは非難を我々に指示する上で十分ではなく、道德の起源は感情である³²。ヒュームは、他者への道德や公德心の形成過程において、来世の安寧を約束するような従来の摂理信仰を代替する道德的原理として、「共感 (sympathy)」の概念を導入する試みを行っている。共感は、今現在において経験可能な感情に基づく道德形成を可能にする概念である³³。

理性概念に基づく権利論や功利主義を超え、動物倫理における新たな展開を見出しうるものとして、共感や感情の導入・ケアの倫理・徳倫理における共同体主義の要素を考慮すべきではないかと筆者は提言したい。共感や感情を取り入れることは、「共感できる動物のみを配慮するのか」といった議論を呼ぶかもしれない。しかしケア的態度は、可能なところ、身近なところからまず始めることに意義がある。さらにケアの倫理は、特定の誰かに対する狭い関心に限定されるようにも思われるが、初期の提唱者であるノディングスも、近年はケアの倫理が社会全体への広がりを持つこと、政治的なものと個人的なものが分けられないことを主張している。「ハインツのジレンマ」の事例であったように、ケアの倫理はヘルスケア制度の不在といった社会状況が抱える問題へも目を向ける。それはケアの倫理そのものが、所有や権利の問題のみにとどまらない、社会的な不正義や政治的課題への取り組み、また社会的連帯への促しといった要素を構造的に含んでいるからであり、その点においてケアの倫理は、動物倫理の政治的実効性も内包していると考えられる。

またスロートがいうように、道德的な行為には感情や共感が伴う。スロートは非道德的

³² Hume. *An Enquiry Concerning the Principles of Morals*, pp. 83-4.

³³ スロートによれば、ヒュームが用いる sympathy の語は、スロートが用いる empathy の意味と同義であるという。Slote, *Moral Sentimentalism*, p. 15.

な態度が、非情 (heartless) だが非合理的 (irrational) ではない場合があることを指摘している³⁴。合理的・理性的な権利論や功利主義が、単なる規範となってしまったとき、動物への共感や感情に基づいて、彼らのニーズを反映した適切なふるまいをすることが疎かになってしまう可能性もある。動物への配慮の「道徳性」という観点から見れば、共感や感情を無視することは不適切であろう。理性のみに依拠しない道徳的配慮という想定は、思想史の発展においても、また実効性という点においても、今後考察する価値のある課題だと思われる。

文献表

- Adams, Carol J. *The Sexual Politics of Meat: A Feminist-Vegetarian Critical Theory*. New York: Bloomsbury Academic, 2015.
- Adams, Carol J. & Lori Gruen, eds. *Ecofeminism: Feminist Intersections with Other Animals and the Earth*. New York: Bloomsbury Academic, 2014.
- Clement, Grace. “The Ethic of Care and the Problem of Wild Animals.” In Donovan & Adams, eds., *The Feminist Care Tradition*, pp. 301-15.
- Dombrowski, Daniel. “The Argument from Marginal Cases: A Philosophical and Theological Defense.” In Grumett & Muers, eds., *Eating and Believing*, p. 155-67.
- Donovan, Josephine. “Attention to Suffering: Sympathy as a Basis for Ethical Treatment of Animals.” In Donovan & Adams, eds., *The Feminist Care Tradition*, pp. 174-97.
- Donovan, Josephine & Carol J. Adams, eds. *Beyond Animal Rights: A Feminist Caring Ethic for the Treatment of Animals*. New York: Continuum, 1996.
- , eds. *The Feminist Care Tradition in Animal Ethics*. New York: Colombia University Press, 2007.
- Gruen, Lori. *Entangled Empathy*. Brooklyn NY: Lantern Books, 2015.
- Grumett, David & Rachel Muers, eds. *Eating and Believing. Interdisciplinary Perspectives on Vegetarianism and Theology*. London: T&T Clark, 2008.
- Hume, David, edited by Tom L. Beauchamp. *An Enquiry Concerning the Principles of Morals: A Critical Edition*. Oxford: Oxford University Press, 1998.

³⁴ Slote, *Moral Sentimentalism*, p. 139. スロートは、規範的道徳と政治的課題のすべての範囲にわたって、エンパシーから始まるケアの倫理によるアプローチが理にかなっていることを、その著作で一貫して示そうと試みている。Cf. 鬼頭葉子「個人から社会へ」。

- Hursthouse, Rosalind. *On Virtue Ethics*. Oxford: Oxford University Press, 1999.
- . *Ethics, Humans and Other Animals*. London: Routledge, 2000.
- MacKinnon, Catharine. “Of Mice and Men: A Fragment on Animal Rights.” In Sunstein & Nussbaum, eds., *Animal Rights*, pp. 263-76.
- Merchant, Carolyn. *Radical Ecology: The Search for a Livable World*. New York: Routledge, 1992.
- Noddings, Nel. *Caring: A Feminine Approach to Ethics and Moral Education*. Berkeley: University of California Press, 1984.
- Regan, Tom. *The Thee Generation: Reflections on the Coming Revolution*. Philadelphia: Temple University Press, 1991.
- Rowlands, Mark. *Animal Rights: Moral Theory and Practice*, 2nd ed. London: Palgrave Macmillan, 2009.
- Slote, Michael. *Morals from Motives*. Oxford: Oxford University Press, 2001.
- . *The Ethics of Care and Empathy*. London: Routledge, 2007.
- . *Moral Sentimentalism*. Oxford: Oxford University Press, 2010.
- Sunstein, Cass R. & Martha C. Nussbaum, eds. *Animal Rights: Current Debates and New Direction*. Oxford: Oxford University Press, 2004.
- 加藤尚武／児玉聡編・監訳、『徳倫理学基本論文集』、勁草書房、2015 年。
- 鬼頭葉子、「個人から社会へ——M. スロートにおける共感と社会正義の関わり」、『長野工業高等専門学校紀要』第 53 号（2019 年）、1～7 頁。
- 横山道史、「日本におけるフェミニズムとエコロジーの不幸な遭遇と離別—フェミニズムとエコロジーの結節点に関する一考察—」、『技術マネジメント研究』（横浜国立大学技術マネジメント研究学会）第 6 号（2007 年）、21～33 頁。